

NEWSLETTER

No.49

30 September 2011

・教員の研究室と電話番号・メールアドレス	・	1
・2011年度教員在室時間表	・	2
・東日本大震災に向き合う地理学界と学生・教員	・	3
・大学院生の研究生生活紹介	・	1 1
・教員スタッフの近著紹介	・	1 3
・経済地理学会第58回大会開催報告	・	1 4

【教員の研究室と電話番号・メールアドレス】

※地理・環境専攻専任教員は全員世田谷キャンパス(世田谷・梅ヶ丘校舎)にいます

	研究室の場所	研究室電話番号	電子メールアドレス
野口	世田谷校舎 10号館 2F1004 研究室	03-5481-3246	noguchi@kokushikan.ac.jp
長谷川	世田谷校舎 10号館 2F1003 研究室	03-5481-5247	hasegawa@kokushikan.ac.jp
岡島	世田谷校舎 10号館 2F1002 研究室	03-5481-3245	okajima@kokushikan.ac.jp
宮地	世田谷校舎 10号館 2F1001 研究室	03-5481-5278	tmiyachi@kokushikan.ac.jp
内田	世田谷校舎 10号館 4F1025 研究室	03-5481-5291	uchida@kokushikan.ac.jp
磯谷	梅ヶ丘校舎 34号館 8F 824 研究室	03-5451-8154	isogai@kokushikan.ac.jp
加藤	梅ヶ丘校舎 34号館 9F 904 研究室	03-5451-8164	k2kato@kokushikan.ac.jp

※教員が大学に在学予定の時間等は、次ページの教員在室時間表を参照してください。オフィスアワーは、基本的に先生が研究室にて、学生の質問等に答える時間です。

※オフィスアワー以外の面会・相談なども在室中に短い時間で済む用事であれば、大抵の先生は急用がない限りは応えてくれます。ただし、基本的には相談や面接等は、事前にアポイントメント (Appointment ; アポ) をとってからするようにしてください。オフィスアワーであっても、出張等で不在の場合や、他の相談者などがいるため時間が割けない場合もありますので、事前にアポを取る方がお互いに好都合です。大学生としての自覚をもった行動を心掛けましょう。

※したがって、教員の自宅、特に非常勤講師の先生宅への電話は、先生からの指示がない限りは控えてください。

※メールを活用しましょう。多くの先生が電話よりもメールでのアポの方が好都合です。ただし、教員のメールアドレスは携帯電話のものではありませんので、すぐ返信がくるとは限りません。余裕をもった連絡を心掛けてください。アポの際には、メールの標題に、学籍番号・氏名を明記してください。先生によっては、標題に番号・名前がないとメールを消してしまう場合があります (迷惑メール・ウィルスメール対策のため)。用件が必ずしも標題になくても大丈夫です。「こんにちは」といった標題のメールは即刻消される場合があるので注意してください。

【2011年度 教員在室時間表】

凡例

講義中
 オフィスアワー
 在室の場合が多い

※春のみ：春期のみ講義。 ※秋のみ：秋期のみ講義。

※金曜日は文学部関係の会議が集中する日です。会議のある先生は大学にいますが、ほとんど会えない場合もありますので、注意してください。第3または第4金曜日には**教室会議**（12：00～）・**教授会**（13：30～）があり、教員全員が会議に出るので、その日の午後はほぼ会うことができません。教授会の日程は年間予定表を参照してください。

曜日	時限	1	2		3	4	5	
	時間	9:00～10:30	10:45～12:15		12:55～14:25	14:40～16:10	16:25～17:55	
月	長谷川	-----			-----			
	岡島	=====			=====			
	磯谷	-----			-----			
	加藤	=====		秋のみ	=====			
火	野口				=====		春のみ	-----
	長谷川				-----			
	内田	春のみ	=====			秋のみ	=====	
	岡島						春のみ	=====
	磯谷		町田校舎					
	加藤	=====					春のみ	-----
	宮地					春のみ	春のみ	-----
水	長谷川	=====			=====			
	岡島	=====			=====			
	磯谷	-----			-----			
	加藤	-----			-----			
	宮地		秋のみ	=====				-----
木	野口	=====			=====			
	長谷川	=====			=====			
	内田	秋のみ	=====			春のみ	=====	
	磯谷	=====			-----			
	加藤	-----			-----			
	宮地	-----			-----			
金	野口	秋のみ	=====					-----
	長谷川	秋のみ	=====					-----
	内田							-----
	岡島	-----			-----			
	磯谷	秋のみ	=====					-----
	加藤	-----			-----			
	宮地	-----			-----			
土	内田	=====			-----			

2) 国土地理院デジタル空中写真の公表と日本地理学会津波被災マップ

これも阪神淡路大震災では無かったデータです。現在、国土地理院が撮影する空中写真は多くがデジタルカメラで撮像された数値データです。航空機の床に設置された空中写真専用のデジタルカメラによって撮影された写真は、GPSと連動しており即座に撮影位置が同定され地図上に位置がおちます。私たちが持っているデジカメと違って、1枚のデータサイズは巨大で普通のパソコンではまともに扱えないほどです。国土地理院では3月12日以降に撮影した1,000枚以上のデジタル空中写真を小さなサイズに直して無償でWebからダウンロードできるようにしました（その一部を図2に示す）。これらの写真の多くは、航空測量会社の専用航空機で撮影されたものでしょう。撮影に関わる専門職の中には、あなたの方の先輩である本教室のOBの方もおられます。この空中写真を使って津波の浸水範囲や被害状況が、複数の機関で図化されました。そのうちのひとつに、日本地理学会災害対応本部が公表したのがあります（http://www.ajg.or.jp/disaster/201103_Tohoku-eq.html）。図3と図4は、ここで示された陸前広田という図幅の南西部にある集落の被災状況です。赤線が津波の遡上範囲、青塗りが家屋の多くが流される被害を受けた範囲です。隣り合う南北の集落で、一方は被害を受け、一方は無傷であったことが読みとれますがその理由は何でしょう。地形図を読むことに慣れているあなたなら、ひと目で判断できるはずですが、この図とは直接関係しませんが、太平洋に突き出た半島部で隣り合う向きの異なる小さな入江と沖積平野を比べても隣り合うものどうして被害の差が大きいという例があると予想されます。



図2 宮古市田老地区周辺の被災状況を示す空中写真の新旧画像
有名な防潮堤防の内陸側まで津波被害が及んだ様子がよくわかる。

3) 衛星データ会社からの情報提供

地球を周回するリモートセンシング衛星も、震災に関する大量のデータを収集しています。これらのデータは普段は有料なのですが、大災害が起こると加工されたものがWebサイトで公開されダウンロードできるような措置がとられます。日本では、JAXAが運用しているALOS（だいち）という衛星のデータが無償でかなり大量に公開されました。震災前後の、光学センサーで取得されたデータの他に、SARという合成開口レーダーのデータも入っていました。無償配付は4/15で終了していますが、いくつかのサイトではこれらのデータを使った成果が公開されています。下記のリンク集を参考にぜひ一度アクセスしてください。なお、ALOSはその後4月22日に機能を停止し大震災のデータ取得が最後の仕事となりました。日本は大規模災害への対応も目的とした高性能の「情報収集衛星」を小泉政権時代に所有し運用しているのですが、このデータが災害で使われたことは一度もありません。この度も同様でした。

この原稿を書き始めてしばらく経ちますが、どんどん情報が増えるばかりです。RESTEC（リモートセンシング技

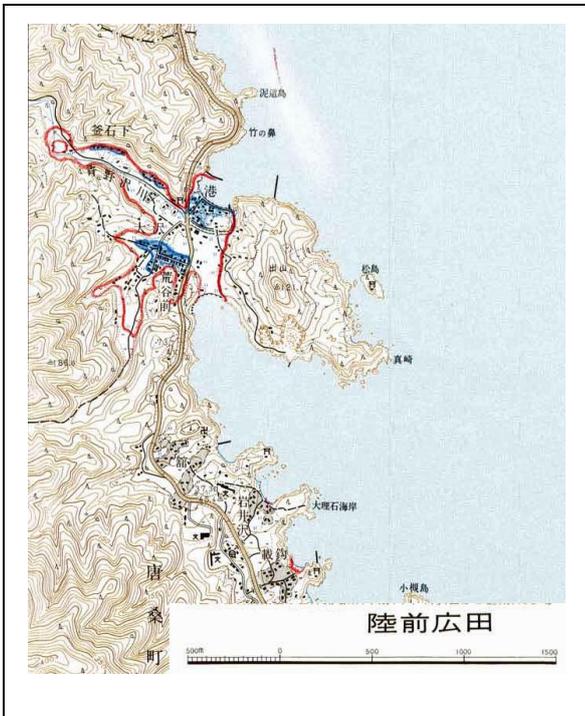


図3 津波被害図

日本地理学会災害対応本部が公表した成果の一部。地形図に判読結果を手書きで記入してある。多人数で判読し、一気に図を作り上げるというような場合は、このようなやり方の方が素早く作業ができるということでしょう。

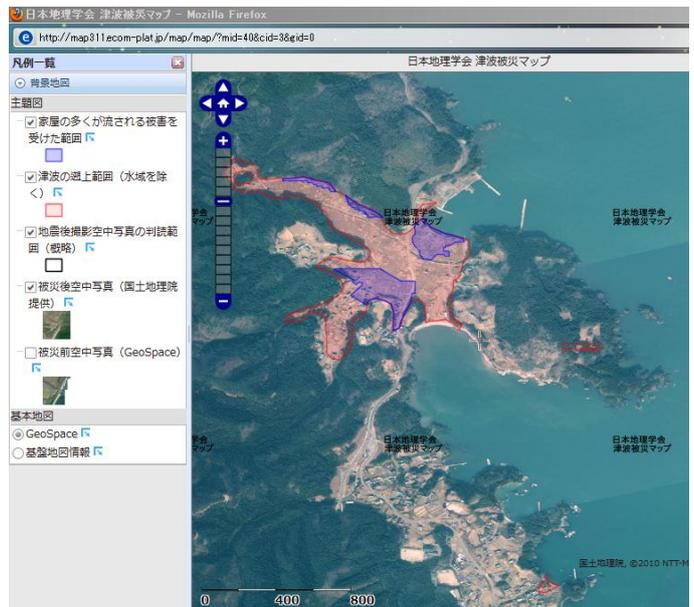


図4 図3の場所を WebGIS で見たもの

文中の URL から、津波被災マップ (e コミマップ版) を選択すると見ることができる。さまざまな情報を重ね合わせたり、特定の情報だけを表示させたりできる。

術センター) のホームページから、二次メッシュ (1/25,000 地形図と同じ範囲) に調整された、岩手県、福島県、宮城県、茨城県の沿岸部の衛星写真地図が大量にアップロードされ、自由に活用できるようになりました (図5 参照)。この地図は、日本の陸域観測技術衛星「だいち」(ALOS)およびタイの地球観測衛星「テオス」(THEOS) により得られた震災前後の衛星画像を使用して作成されています。被害状況の把握などに積極的に活用されることでしょう。

図名	図名 (ふりがな)	2次メッシュ番号	地形図番号	PDF
仙台空港	せんだいくこう	574017	NJ-54-21-4-1	震災前 震災後

画像をクリックするとJPEG (サムネイル) を別ウィンドウで開きます。詳細版は上記のPDFリンクを右クリックからダウンロードしてください。

↑北

↑北

↓南

図5 震災前後の「仙台空港」衛星写真地図 (1/25,000 地形図) のダウンロード画面

4) 地図会社からの情報提供や GIS ベンダーによるソフトウェアの提供

みなさんの先輩達は、さまざまな地図会社へ就職しています。そのような地図会社（地図調整業者）も、災害調査や復旧支援を目的として地図の公表や地図ソフトの提供を Web でおこなっています。災害ボランティアというと、現場に出かけて身体を動かすことを想像しがちですが、今回の震災では地図や空中写真の作業に長けた学生や若手の研究者達が地図の作業を通じて多大な後方支援をおこなったとのこと。地理や環境を学ぶことで、新しい社会貢献ができる可能性をみせてくれた震災でもありました。このあたりの話は、下記に示した『GIS NEXT』誌の記事でも詳しく書かれています。

冒頭で出た Google 社は、震災前後の衛星画像を公開して話題になりました。しかし、Google は WebGIS を活用したさまざまなサービスを支援しています。たとえば、「必要物資・支援要求マップ 311HELP.com」(<http://311help.com/>) です。被災者が自分の居場所と必要な物質を書き込めるものです。被災直後には、電気や通信が途絶した被災地では役に立ちませんが復旧すれば大きな力になるのがこのようなサービスです。阪神淡路震災を経て、このようなサービスも進化したといえましょう。

大手の地図会社や GIS ベンダーは、詳細なデジタル地図や GIS ソフトウェアを無償で提供しました。自社製品の PR という意味もあるのかもしれませんが、自治体やボランティアの復興活動に大きく貢献していると思います。次にあげる会社の Web にアクセスし、具体的な支援方法をみておくことは、社会貢献の仕方を学ぶことにもなるし、就職活動の際の参考にもなるかもしれません（アジア航測、国際航業、パスコ、ゼンリン、東京地図研究社、北海道地図、東京カートグラフィック、エスリジャパンなど）。

今年の夏（2011年8月8～9日）、「日本国際地図学会」が国士舘大学で開催されました。この学会では、東日本大震災に関連する地図の作成に関するシンポジウムが開催され、ネットでリアルタイム配信されました。そして多くの地図が梅ヶ丘 A 棟2階のエントランスで展示されました。なお、下記の雑誌でも震災特集号が組まれています。地理実習室などでぜひ目を通しておいってください。

(参考文献)

- ・『地図中心』（日本地図センター発行）「東日本大震災速報」5月号 2011年5月10日発売
- ・『地理』（古今書院発行）「緊急特集 東日本大震災」6月号 2011年5月25日発売
- ・『GIS NEXT』（ネクストパブリッシング発行）「思いをつなげ 大震災に挑むGISコミュニティ」35号 2011年4月25日発売

なお、日本地図センターの次のページには、地震や津波に関する特設サイト、関連機関へのリンクページがあります。

<http://www.jmc.or.jp/other/earthquake110314/index.html>

RESTEC の次のページは、災害関連データのリンク集があります。 http://www.restec.or.jp/?page_id=11603

5) 現地調査の記録を地図に



図6 津波前後の変化

2010年10月と2011年4月の画像に2011年6月25日に現地を歩いたルートを重ねた

図6に示した2枚の図を見てください。奇跡の一本松で有名になった陸前高田のGoogle Earth画像です。画像上の線は、私が現地で歩き回った軌跡を首からぶら下げたGPSロガーという装置（単三電池1本程度の大きさで、1万円程度で買えます）で記録したものです。津波前と津波後の画像に、震災の三ヶ月後に現地を歩き回った際の軌跡をオーバーレイしてみました。変化の大きさに驚かれることでしょう。

最後になりましたが、この度の東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げ、被災された皆様に対しまして心よりお見舞い申し上げますとともに一日も早い復旧復興をお祈りいたします。なお、この文章は4月に書いたものをベースに、その後の情報を書き加えました。すこし情報が古くなっていることをご承知おきください。

—*—

あなたにはなにができますかー被災地でのボランティア活動から考えたことー

地理・環境専攻3年 山本 朗子

3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とする国内観測史上最大のマグニチュード9.0を記録する巨大地震「東北太平洋沖地震」が発生しました。今回の災害（東日本大震災）は、マグニチュード9.0という大地震、太平洋沿いの各県での大津波、大火災や液状化現象、福島原発の放射性物質の漏洩など、多くの被害が見られます。これらの被害の中には、福島原発をはじめとしたわたしたち学生ではどうしようもできない問題も多々あります。でも、被災地の方々が「あの土地でまた生活したい」と思う限り、わたしたちの力は必要とされると思います。

私はこれまでに3回被災地に足を運んでいます。普段テレビで見ているあの光景あの映像は、所詮、画面の中の被災地です。現地には今まで見てきたものとの明らかな違いがあります。それは被災地の「匂い」です。テレビや新聞では伝わってこないこの「匂い」は、わたしたちに独特の緊張感を与えます。次第にニュースや新聞でも取り上げられることが少なくなり、中には被災地の状況もよくなっているのだと思う方もいると思います。しかし、被災地には震災から2カ月以上経った今でも、まだまだ3月11日のままの場所がたくさんあります（写真1・2）。この現状をみなさんには知ってほしいです。



写真1 気仙沼市本吉地区
見渡す限り建物が流されてしまっています



写真2 海側から気仙沼向洋高校を眺める
津波が校舎の3階まで襲ったことがわかります

宮城県気仙沼市での活動の際に拠点としていたのは、「卒業式まであと1日」と書かれた南気仙沼小学校でした。そこから少し歩いた南郷という地域は、まだほとんど手をつけていない場所でした。本来であれば食卓に並ぶはずだったサンマの腐敗した匂いと、ヘドロが交った潮の香りがなんとも言えない匂いとなって被災地を包んでいます。半分に折れた電柱、街の中にある舟、津波の高さを物語る建物に残った海水の痕。土台しか残っていない家、車が突っ込んだ家、川の中にある家・・・（写真3・4）。街は瓦礫と化し、生活感あふれる家財や思い出の詰まったアルバム等がいたるところに山積みになっています。もし、自分の家が全て流されてしまったら。私だったらどうするだろう、とテレビで見ているときとは比べものにならないほど、リアルに考えました。

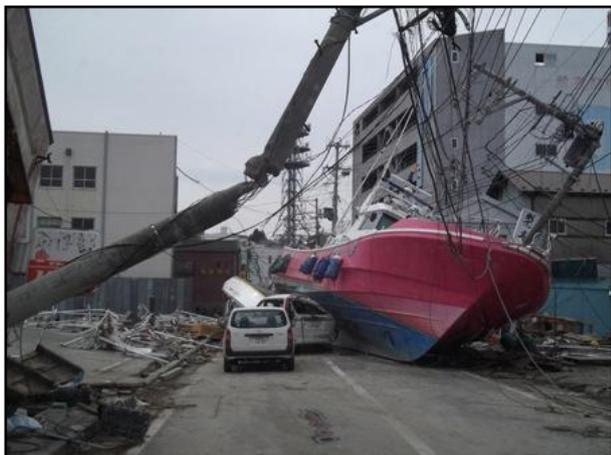


写真3 石巻市女川付近
中心市街地に漁船が流されてきていました



写真4 気仙沼市幸町
津波の威力で1階部分が崩れ落ちています

私たちの作業は、家は残っているのもたまたそこで暮らそうと考えている方々のお宅での作業でした。具体的には、被災した家屋の家財道具の運び出し、床板をはがし、ヘドロの掻き出しなどでした(写真5・6)。あるお宅では作業を終えるのに、学生約40人が入っても丸2日かかりました。この2日間で私がお手伝いできたのは、たったの1軒。この南郷地域の住宅をすべてきれいにするには一体どれだけの時間が必要なのだろうと考えたら、気が遠くなりそうでした。けれど、被災者のみなさんは、本当に強かったです。絶対復興させよう、との志に頭が下がりました。「もう前を見るしかないんだよ、がんばろう」と、元気を置いてくるはずの私たちが逆に励まされるようでした。



写真5 床板をはがしている様子



写真6 床下のヘドロを掻きだしている様子

「ありがとう」。この言葉で人は頑張れると思います。そして、笑顔になれると思います。誰にでも、相手を元気にすることができます。私たちにできることはなんなのでしょう。それは現地に行って笑顔にしてあげることと、この震災を風化させないことだと私は思います。

気仙沼市のボランティアセンターの方に、「IVUSA(いびゅーさ)さんは、重機みたいだね」と言われました。学生のもつ動員力と元気とパワーを存分に活かした活動ができたのかなと思いました。一人ひとりの力は小さいかもしれませんが、一人で何かをすることは困難です。「所詮学生」と思うかもしれませんが。私達学生の力は微力かも知れません。しかし、決して無力ではありません。学生の元気を被災地に置いてきましょう。

【主催】NPO 法人国際ボランティア学生協会 IVUSA (いびゅーさ)

1993年より国際協力・社会福祉・災害救援・環境保護の4つの活動を柱に、国内外様々な活動を行ってきました。現在までに、500以上の事業を実施し、首都圏を中心に約83大学、約1,300名以上の学生会員が活動しています。日本列島を襲った数々の災害では「中越地震救援活動」をはじめ20回以上もの災害救援活動を展開してきました。2006年にそうした救援活動と、日々の会員の危機管理講習や災害想定訓練(IVUSAクライシスマネジメント)が評価され『第10回防災まちづくり大賞』、最高賞の総務大臣賞をいただいています。

東日本大震災に対して、本協会では3月16日～4月1日に救援活動を、3月28日からは復旧支援活動を続けてい

ます。

■救援物資輸送支援

発災直後、まずは命を守る救命活動であると考え、水や毛布や食料などの物資を、公的な物流システムが整うまでの間に、宮城県石巻市、女川町、南三陸町、多賀城市に輸送しました。

■炊き出し支援

発災後、ガス・水道・電気といったインフラが回復し始めた発災約半月後までの間、宮城県石巻市や南三陸町の避難所や人が多く集まる幹線道路付近で、豚汁など温かい飲食物を提供しました。

■募金活動

関東・関西で東日本大震災救援募金活動を行いました。募金で集まった義捐金は8割を日本赤十字社へ送り、2割は救援物資の購入費及び救援活動の資金に充てさせていただきました。

■復旧支援

余震や原発事故等の影響を確認しながら、現地の災害ボランティアセンターと連携し、被災家屋での家財運び出しや畳・床板上げ、ヘドロ掻き出しなど、住民の方のニーズに沿った活動を実施しています。これまでに7回派遣しました。

(6月1日時点)

■関係諸機関や防災協定に基づく支援

防災協定を締結している千代田区社会福祉協議会と連携した区内での復旧支援活動や、東京都と連携した県外移住者に対するボランティア活動、救援物資の仕分け作業等を実施しています。

詳しくはHPをご覧ください。URL：<http://www.ivusa.com>

—*

東京電力福島第一原子力発電所事故に揺れる阿武隈高地の農村

宮地 忠幸

3月11日の東北地方沖大地震とその後に発生した巨大な津波の影響を受けて、東京電力福島第一原子力発電所（以下、福島第一原発と略称）では、1号機・2号機・3号機で核燃料溶融（メルトダウン）が発生しました。とくに、原発事故として深刻な事態に陥ったのは、メルトダウンの影響等で1号機から4号機では大量の水素が発生し、3月12日に1号機で、14日に3号機で、15日に2号機と4号機で、それぞれ水素爆発が発生したことに起因しています。水素爆発によって、2号機を除いては原子炉建屋が大きく損傷し、そこから大量の放射性物質が外部へ漏出してしまいました。こうした一連の事態は、地震の発生によって外部電源が断たれ、その後の津波によって非常用電源装置が機能しなくなったため、原子炉内や核燃料プールへの注水が不能になったことで、甚大な事故へとつながってしまったといわれています。

福島第一原発事故の影響は、原発立地周辺市町村のみならず、福島県内の阿武隈高地から中通りに位置する市町村、関東地方の都県等にも広がっています。とくに、福島第一原発から半径20km以内の区域は、4月に「警戒区域」となったのをはじめ、20km圏外の地域でも「計画的避難区域」と「緊急時避難区域」が設定され、当該市町村の住民の皆さんは、避難および避難準備を余儀なくされています。私のゼミでは、2009年度以降、二本松市（旧安達郡東和町）の西谷集落（福島第一原発から北西約45km）において、水稻作の体験学習と民泊を通じた住民の皆さんとの交流活動を実施してきました（ニューズレター44号、46号に関連記事が掲載されています）。原発事故発生後、現地との連絡を重ねるとともに、ゼミ生と私の間で数回に渡る検討会を行いました。結果的に当面はゼミとして現地での活動を行うことは難しいと判断せざるを得ませんでした。私自身は、4月17日～18日、5月3日～4日に現地を訪問し、原発事故後の生活の現状や今年の農作業の計画について話を伺ってきました。

放射性物質は見えませんが、臭いもありません。現地の西谷集落は、地震による影響は一部にあったとはいえ（屋根瓦が一部で落ちたり、蔵の壁が崩れたりしたお宅もありましたが）、幸いにして大きな被害はありませんでした。物資の不足も、一部3月～4月にかけて生じたとはいえ、基本的には大きな問題はありませんでした。津波の被害もありませんでした。今年も普段通りの春の風景が広がっていました（写真1：写真はいずれも2011年4月に宮地が撮影）。しかし、3月中に福島県産のほうれんそうから暫定基準値を超える放射性物質が検出されたことから出荷停止となり、私がよく知る農家のビニールハウスには、収穫を断念せざるを得ないほうれんそうが放置されていました（写真2）。

4月中旬の日曜日、私たちが大変お世話になっている西谷公会堂で行われた寄り合いは、とても重い空気に包まれていました。「これまでにない事態。正直、これから先の生活、場合によっては自分たちも避難対象になる可能性さえある状況に、不安がある。」といった意見や「二本松市は水稻作の作付けは認められたが、作ったところで売れるかどうか



写真1 阿武隈高地の山里に咲く桃の花



写真2 収穫を断念せざるを得なかったほうれんそう

かもまったく分らない。売れないなら、作付けしない方がよいようにも思う。兼業農家もぎりぎりのところでやっているのだ。」「今回の原発事故の原因ははっきりしている。東電にしっかり補償を求めていく。書類の整理が求められるので、月単位でしっかりと状況を整理しておくべき。」などの意見が相次いで出されていました。

また、国士舘大学との交流事業については、「国士舘大学のゼミがきてくれるのは嬉しい。受け入れもできる（物資の不足などはほとんどない）。学生との意見交換もしたい。」「しかし、昨年と同じようには作業できないだろう。西谷の農家の経営に、農作業ボランティアとして関わってもらうくらいがよいのでは。」「学園祭には今年も行きたい。でも、東京の人はわれわれを本当に受け入れてくれるのが不安。事実、福島県民の避難先の小学校ではいじめが起きているし、福島ナンバーの車に怪訝な視線が投げかけられている。」という意見も出されました。写真3にあるように、西谷集落は、20歳代から30歳代の若い夫婦とたくさんの小中学生や幼稚園児、幼児が暮らすムラです。小さなお子さんをお持ちのお父さんは、「もはや、私たちは開き直りの気持ちでもある。自分たちの責任でこのような問題が起こっているのではないし、政府も本気で私たちの生活を守ってくれるとも期待していない。なるようにしかならない。」と複雑なそしてやりきれない思いを語っていただきました。また、この地で専業農家として有機農業を続けてきた農家の一人は「いつかはわからないが、本当の意味で『LOHAS（健康で持続可能な生活）』が実現できる山里にしたい。先が見えないのに困っているが、前は向いていた。農作業もそういう意味で続ける。今、私（たち）が農作業を止めてしまったら、本当に福島や西谷で生活していくことが難しくなってしまう」とおっしゃっていました。ただただ胸が一杯になる思いでした。と同時に、東京電力の電力供給を受けず（そればかりか、二本松市は原子力立地給付金の交付対象自治体でもないのです）、今回の事故で一方的に被害を押しつけられている西谷集落（や福島県）の皆さんに対して、首都圏に暮らす私（たち）の責任も感じざるを得ませんでした。



写真3 西谷公会堂での寄り合い



写真4 二本松市役所東和支所2階に置かれた浪江町役場

4月には、まだ浪江町役場が二本松市役所東和支所の2階に仮設されていました（写真4）。ひっきりなしに鳴る電話と避難している町民の皆さんに、町役場職員が休日平日・昼夜を問わず対応に追われていました。原発事故は未だ収束の目途が立っていません。私を含め、皆さんは福島県民の方々の思いをどのように受け止め、何をしていたらよいのでしょうか。このことは、今後の電力需給のあり方を含め、私たちが考える必要のある「宿題」ではないでしょうか。

◆ 大学院生 研究生活の紹介 ◆

セカンドスクール指導員での経験を地理学研究に活かす

大学院人文科学研究科 池田 雄斗

1. セカンドスクールとは

セカンドスクールというフレーズ、聞き慣れている方は少ないかもしれません。今回私が紹介する東京都武蔵野市の場合、セカンドスクールは「普通の学校生活（ファーストスクール）ではできないような体験学習を、授業の一部として自然豊かな農山漁村に長期滞在して行う」ものとして定義されています（武蔵野市教育委員会 HP 参照）。武蔵野市では、1995 年度から市内全小学校の 5 年生を対象に、このセカンドスクール事業を実施しています。普通の学校生活（ファーストスクール）では学ぶことが難しい総合的な体験学習活動を、約一週間のあいだ、農山漁村（セカンドスクール）に場所を移して学習するのです。

武蔵野市のセカンドスクールは各学校によって体験学習の場所（地域）が異なります。群馬県、富山県、長野県、新潟県、山形県などの各方面に分かれるので、セカンドスクールといっても様ではなく、学校によって触れ合う文化が違います。生徒たちがお世話になる地元の人々も、食事内容や生活様式も、持ち帰る思い出も、すべて異なるのが大きな特徴といえるでしょう。

2. セカンドスクール指導員とは

私は指導員として、セカンドスクールに何度か帯同しています。セカンドスクールでは民宿に泊まります。指導員は民宿ごとに一名配置され、生徒たちの民宿生活をサポートするのが仕事です。指導員の構成は、やはり若さ溢れる大学生が多いと思います。武蔵野市出身の学生であったり、学校教員を目指している学生であったり、経緯は色々ですが「子ども好き」と「体力自慢」と「責任感」がすべての指導員に共通する点だといえます。

「子ども好き」…言わずもがなですよ。一週間もの長期間、7～8 名の児童で構成される班を一班任されます。稲刈り（写真 1）やソバ打ち、岩魚つかみなどのイベントは、学校の先生や地域の方々と一緒に、児童が怪我なく安全に取り組めるように行動します。そして民宿に戻ってからの生活は、指導員が全権を掌握します、いわば責任者です。同じ屋根の下で寝泊まりし、食事をし、掃除もします。言い換えれば、一週間児童が近くにいらない時間はないのです。相手は小学生ですから、騒ぐこともあればケンカをしたりもします。ホームシックや体調不良を訴える子も出てくるかもしれません。そんな時に親身になって接するのが指導員です。子どもが好きでないと務まりません。

「体力自慢」…一週間児童と一緒に野山を駆け回ります。また児童が夜に寝静まってからも指導員には仕事があります。児童一人一人の様子を記録ノートにまとめる作業です。夜な夜な睡魔と戦い、こっくりしながら記録のノートをまとめる毎日、こんな所にも体力が必要です。

「責任感」…実はこれが最も大切だったりします。東京に残る保護者の方々は、可愛い我が子を一週間も農山村地域に送り出すのですから、当然心配するものです。指導員はまさに保護者の方々の代理として、児童の安全確保を託されるのです。保護者からの視線は緊張するものがありますが、学校教育に一時でも携わる身として、責任ある行動が求められていることを実感できるはずです。

3. 指導員を経験して得られるもの

最も大きな「収穫」は児童たちとの強い絆です。セカンドスクールが終わりに近づき、武蔵野市に帰ってきて児童たちとお別れをする際、本当に寂しい気持ちになります。児童と指導員の距離が一週間で自然と縮まり、強い絆で結ばれていたことに気付けるはずです。とても感動的な一幕であり、大きな達成感を得ることができるでしょう。

またセカンドスクールは指導員にとっても学習の場がたくさんあります。稲刈りやソバ打ちなどはもちろんのこと、地元のおじいちゃん・おばあちゃんが語る地域の歴史・文化・伝統などに関するお話は、むしろ大人である指導員のほうが刺激になるかもしれません。

そして一週間のあいだ、地元の特産品を活かした、民宿の美味しいご飯を食べることができます。児童への指導が大変だから本来は疲れて痩せるはずなのに、むしろ太って東京に帰る指導員がいる。という噂をよく耳にします。原因はやっぱり美味しいご飯の食べ過ぎです。

4. セカンドスクール後も続く地域との交流

私がセカンドスクール指導員で訪問しているのは、富山県南砺市利賀村、人口 700 人前後のいわゆる限界集落です。セカンドスクールに帯同したのがきっかけで利賀村の商工会の方々と仲良くなり、東京で開催する物産展を手伝ったり、利賀村で開催されるお祭りにボランティアとして参加したり交流を続けています。今年の GW にも利賀村の春祭りに参加し、一緒に獅子舞を舞ってきました（写真 2）。どんな時でも地元の方々が「ようきた、ようきた！」と嬉しい歓迎（写真 3）。お酒を飲みながらも地元の産業の話や、利賀村出身の若者が都会に出て行ってしまいう話など、生の声を

聞かせてもらえるのも貴重な経験です。(写真4)

また、新しい出会いもありました。利賀村では首都圏在住の大学生・社会人メンバーを中心とした若者グループが「利賀ゼミ」なるものを開講して、村の方々と継続的に交流をしています。若者グループは利賀村をフィールドに、都会では味わえない豊かな経験を「大人の総合学習」と題して実践しています。新しいスタイルの都市農村交流が、大変興味深いところです。こちらも仲良くさせていただいています。

5. セカンドスクールでの体験を研究に活かす

セカンドスクールに帯同することで、いかに綿密な用意をして、利賀村の方々が武蔵野市の児童たちをもてなしているかということに気付くことができました。それは食事や宿泊のような、一般的な観光でも提供されるようなサービスの範疇だけではなく、稲刈りや岩魚つかみ、林業体験といったあらゆる体験活動にも、武蔵野市の児童たちを満足させるための工夫が凝らされているということです。「見る」観光から「体験する」観光へのシフトに、私は農山村における観光の、今後へ向けた可能性を感じています。

また、観光の地理学の研究には、「地域」を知り、そこに住まう「住民」を知る必要があります。地域との出会い方、関わり方、信頼関係の築き方といったかけがいのないものについても、セカンドスクール指導員を通して学ばせてもらいました。地理・環境専攻の学生にはオススメの経験です。興味があれば詳しくお話ししますので、ぜひ地理情報処理室にいる池田を訪ねてください。

[参考 web サイト]

- ・武蔵野市教育委員会 (武蔵野市の特色ある教育：セカンドスクールについて)
http://www.city.musashino.lg.jp/kyoikui/tokushoku_kyoiku/004213.html
- ・『セカンドスクール情報はこちら』 <http://www.city.musashino.lg.jp/cms/kyoiku/00/00/13/00001341.html>
- ・『「利賀ゼミ」農山村を満喫したい大学生へ』 <http://togazemi.jimdo.com/>



写真1 生徒たちの稲刈りの様子



写真2 獅子舞の見学
なかて私も入っています



写真3 いつも歓迎してくれる民宿のお母さん



写真4 農山村では宴の付き合いが大切です

【教員スタッフ近著】

加藤幸治（2011）：『サービス経済化時代の地域構造』日本経済評論社，3400円＋税



加藤幸治先生の研究に関するこれまでの成果をまとめた一冊です。加藤先生ご本人から内容を紹介していただきました。

内容紹介については、東京都立中央図書館の内容紹介が実に正確で、かつ驚くばかりのものだったので、それを引用します（本書の序章の第1節に書いてはありますが、図書館司書のプロはすごい！という感じ）。

内容紹介：事業所サービス業の動向を中心に据えて、日本経済がどのような「サービス経済化」のプロセスをたどってきたのか、そして「サービス経済化」にともなって日本経済が地理的にどう変容しつつあるのかを具体的に検討する。

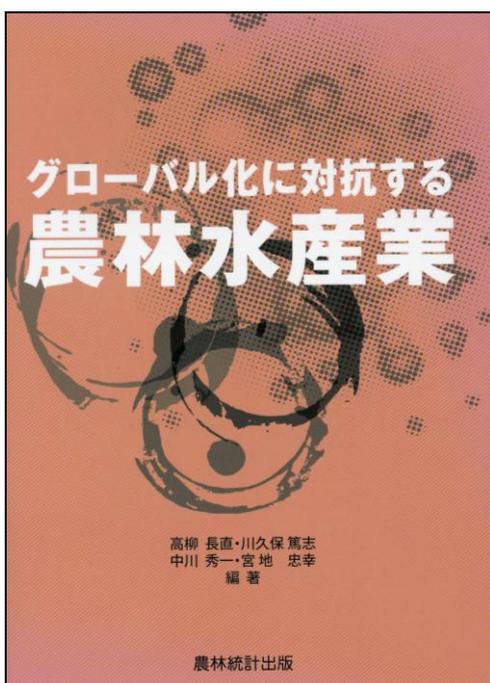
補足すれば、日本の「サービス経済化」においては、1970年代以降における市場環境・競争条件の変化とこれに対応する企業（とくに大企業）の戦略・行動が決定的に重要な役割を果たしてきたからこそ、事業所サービス業の拡大が先行し、その地理的・地域的展開が、サービス経済化にともなう「一極集中」、なかでも東京への「一極集中」を、問題視されるレベルにまで引き上げる、1つの強力な要因となって作用していること。こうした過程を明らかにしたのが本書です。

ちょっと難しく感じるかもしれませんが、「東京」を巨大化させ、「地方」を停滞・衰退させる要因を統一的に捉えようとしたものであり、実態から考えている結果ですので、それほど「難解」なことをいっているわけではありません。

「サービスの地理学」の教科書としても使いますので、興味ある人は受講してくれば、授業の中でも詳しく解説していきます。

※『地理学評論』第84巻第4号に、加藤和暢先生（釧路公立大学）の書評が掲載されています。

高柳長直・川久保篤志・中川秀一・宮地忠幸編（2010）：『グローバル化に対抗する農林水産業』農林統計出版，2300円＋税



宮地先生が、編者の一人となってまとめた一冊です。

本書のタイトルにある「グローバル化」とは、世界の制度が地球規模で統一化していく現象を指しており、その一つの象徴的な動きがWTO（世界貿易機関）体制の下で促進されている農産物貿易の自由化です。本書に収録された論文では、輸入農産物の国内農産物市場への参入実態とその国内産地への影響が詳述されている一方で、農産物貿易の自由化時代における（日本国内）農産物産地の対応方向（低コスト化、高付加価値化、流通資本や小売資本との連携、生産者間・産地間の連携）の有効性と課題が、具体的な実態をもとに検討されています。

「農村空間と社会」や「食と農の地理学（2012年度から開講）」の参考書としても使用し、授業時にも解説を加えます。

なお、本書の執筆者の多くは、ほぼ毎月開催されている「農山村政策研究会」（インターカレッジの研究会）のメンバーでもあります。農業や農村問題に関心もつ大学院生や学部生も多く集まりますので、関心のある方は是非参加してほしいと思います。

※『農業経営研究』第49巻第1号に、村上智明氏（東京大学大学院）の図書紹介が、『経済地理学年報』第57巻第2号に、吉田国光先生（熊本大学政策創造研究教育センター）の書評が掲載されています。

経済地理学会第 58 回大会が国土館大学で開催されました

2011年5月20日から23日にかけて、経済地理学会第58回大会が国土館大学世田谷キャンパス（梅ヶ丘校舎）で開催されました。経済地理学会（1954年設立）は、会員数735名（2011年9月1日現在）で、毎年シンポジウム形式の大会が開催されています。今年の共通論題シンポジウムのテーマは、「大都市圏におけるサービス・文化産業の新たな展開と都市ガバナンス」でした。前ページの「教員スタッフの近著紹介」でも紹介した「サービス経済化」時代の地域構造を一貫して研究されてきた加藤幸治先生が、パネリストの一人として報告し、議論を深めました。

大会では、全国から150名ほどの会員が集まり、シンポジウムをはじめフロンティアセッション（若手研究者の研究報告の場。多くは学位論文〔博士論文〕の成果報告）やラウンドテーブル（学会で注目すべきテーマを集中的に議論する場）などで議論を深めるとともに、懇親も深めました。

また大会期間中は、地理・環境専攻の延べ12名の学生さんにアルバイトとして参加してもらい、受付業務等を行ってもらいました。全国から集まった先生方から「国土館大学には、素晴らしい学生さんが多いですね」とお褒めの言葉を多数いただきました。協力いただいた皆さんに心から感謝いたします。



写真1 研究発表する加藤先生



写真2 自由討論で議論する加藤先生



写真3 ラウンドテーブル
「東日本大震災の復旧・復興と経済地理学の課題」



写真4 懇親会に参加するアルバイト学生たち

経済地理学会は、大会時のシンポジウムもさることながら、全国5つの支部（北東、関東、中部、関西、西南の5つ）活動が充実しています。1年間に4～5回の例会が支部ごとに開催されており、そこでは十分な発表時間と質疑応答の時間が用意されています。現代社会における産業問題、地域問題、地域政策等を、しっかりと議論しながら知見を深めようとする学会の姿勢がそこに現れています。こうした問題やテーマに関心をもつ学生さんは、支部ごとの例会に参加してみると、自身の卒業論文のヒントを得られるかもしれませんね。例会に集まる会員の皆さんは、若い大学院生や学部学生さんを大切にしてくれます。一度参加してみたいはいかがでしょうか。詳細は、次のHPを参考にしてみてください。 >> 経済地理学会ホームページ：<http://www.economicgeography.jp/index.html>